異能物対策本部ゴ●ギツネ傍迷惑

セクシー迷惑ゴールデンフォックスVS妖怪・壁尻（やっぱり役立たずのエロ要員です）

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19568687

R-18, 守エク霊, エク霊, モ腐サイコ100

ゴ●キツネシリーズ2作目です。

以下内容がブッ刺さってますので御御足にご注意ください。

霊幻がアホの子（今回は割とまともかもしれないが多分うそ）
エクボが激しいツッコミ体質（今回はおとなしめ？）
キャラ崩壊めっちゃ注意
一部モブキャラとの会話シーンあり

なんでもお許しいただける方のみお読みください。
Kが書きたいように書いたのでドチャクチャです←えっ
エロはないのですが、そういう表現があるためR18指定しております。
本番重視の方、ごめんよ？？？

いつもお読みいただきありがとうございます。
マシュマロなどくださると椅子から転げ落ちる勢いで泣いて喜びます！！！！！

Table of Contents

セクシー迷惑ゴールデンフォックスVS妖怪・壁尻（やっぱり役立たずのエロ要員です）

「モブニャン！リツニャン！」
必死になって叫ぶゴールデンフォックス。彼が緊張感を露わに叫んだ二人は、決死で敵の攻撃をかわして反撃の機会を窺っていた。荒く息を吐く兄弟は俊敏な敵の動きに翻弄され、本来持っている力も限界に近い。生えた黒い猫耳が緊張にピンと立つが、集中力も切れかかっていることは見ていて明白だ。
「ゴールデンフォックス！あんたは下がってて！」
リツニャンが心底嫌そうに顔を顰めながら、闇を照らす街灯に着地して言う。それに続きモブニャンがたし、と地面に手をついて汗を垂らしながら言う。
「そうです師匠！こいつらあんたのワキ毛狙って襲ってくるんだ！」
「なんで今日に限って剃り残してるんですか馬鹿なんですか！」
「仕方ねぇだろ！剃ろうとしたら酔っ払ってたから剃刀でワキ切っちまってそれどころじゃなかったんだからな！痛えんだぞ！」
ビシリと指を指してキメポーズをし、もうかさぶただ！とむふんと鼻を鳴らして腰に手を当ててふんぞりかえるゴールデンフォックス。
「そんな自信たっぷりに言うな変態！」
「リツニャンかわいい！！」
「ギャッフゥン！」

なんだこの阿鼻叫喚。

妖怪ワキ毛吸い。うら若き乙女の剃り残しのワキ毛に喰らいつきフェロモンを嗅ぎ舐めるというただそれだけをする迷惑な異能物。

最近ではもっぱら脱毛派が主流となり剃り残している乙女の方が少ないようで妖怪は飢えていた。調味市で被害が増えていくそんな中、退治のために白羽の矢が立った（？）のがゴールデンフォックスである。どういうわけか彼の剃り残しのワキ毛から放たれるフェロモンに飛びついて来たその妖怪は、いままさにゴールデンフォックス（のワキ毛）を手篭めにせんと暴れ回り、その俊敏さを極めてシュシュシュとあたりを飛び回っているのだった（なんでだよ）。まだ剃刀派の乙女から依頼を受け、今宵も闇夜に煌めく星の如く、ワキがガバ見えのバニーコスプレで挑む。その衣装は、頭にウサギの耳の黒いカチューシャ、首元にホワイトカラーの襟にショート丈の黒ネクタイを締め、腕はイブニンググローブ丈の肘上まである長さの黒いグローブで覆われている。乳首にハート型の黒いニップレスを装着しているだけの裸の胸に柔らかな腹部が露わになった細い腰には黒ビキニ、尻には白くふわふわな尻尾が鎮座し、脚は全体的に粗めの編みタイツに包まれ、黒光りするヒールで足元をシメる。編みタイツの隙間からは濃いめのすね毛がちろちろと出ているのは・・・・・・愛嬌、なのか？
「剃り残しがあるから来るんだろ…？」
だったら、と桃色の唇がぷるりと震えて笑みを漏らす。
「こうすりゃ良い」
きらりと光る金属。
手元を飾るのは、コンビニで売ってるT字型剃刀（300円税抜）。その刃先をワキ肉にひたりとあてがう。
「必殺！剃り落とし！！」
その掛け声と共にゴールデンフォックスがワキを刃で撫で付け、己の剃り残しのワキ毛をキメ顔でぞりりと剃り落としたのだった。はらりと散る、ワキ毛（そういう表現はいいから）。
「いまだモブニャンリツニャン！」
「はい師匠！」
「言われなくてもッ！」
剃毛後のワキを指で触れて「あっ一本残ってた」と言いつつ追加で剃り落とすゴールデンフォックス。
いよいよ妖怪は悲痛な叫び声を上げて、己の動力源となるワキ毛の

消失に怒り狂って、真正面から猛スピードで襲いかかって来た。この展開に、ゴールデンフォックスはニヤリと口角を上げて笑んだ。そしておもむろに、その柔らかな唇で言葉を紡ぐ。
「ワキ毛が無くなって嫌ならなぁ」
言いながら彼が腕組みをしてカッ、と踵を鳴らして脚を開いて立ち、グンと睨みつける。そして言い放つ。
「すね毛に逃げたっていいんだよ！！」
「何公式パクってセリフ言い回してんですか頭おかしいだろ！」
「師匠かっこいい！」
「兄さん？！」
ゴールデンフォックスの言葉に感動して瞳をきらきらさせたモブニャンが、その間に迫って来た妖怪に、念動力を限界まで込めた拳を叩き込んだ。ボグォ、と派手な音がして妖怪の身体がびちゃびちゃと弾け散る。
「汚ない花火晒してんじゃないよ兄さんの前で」
目の座ったリツニャンが眩いばかりの光を両手から放ち、妖怪の散った肉体をぶすぶすと焼いていく。壮絶な悲鳴をあげながら妖怪はジリジリと焼け焦げて、最後にはチリと音を立てて跡形もなく消えてしまった。灰すら残さず綺麗に焼き切るリツニャンに、モブニャンは「リツすごい！」と感動して目をきらきらさせている。おいモブお前さっきまでゴールデンフォックスのことかっこいいって言ってなかったかなんだその身替の速さは。
「む、むごいな！ははっ」
「あんたもお望みならいつでも」
顔を引き攣らせて笑うゴールデンフォックスにリツニャンの冷たい笑みが突き刺さる。はぁ、ツン猫最高かよ。
なにはともあれ、異能物である妖怪ワキ毛吸いの退治を無事に終えることが出来た一行は、ひと段落と息をつく。そして不意に聞こえる、パシャパシャとシャッターを切る音たち。その音を聞いてゴールデンフォックスはうふ、と笑って茂みから覗く数多のカメラのレンズたちに向かって前屈みになり、無い胸の谷間を強調するかのように両腕を寄せて、投げキッスを喰らわした。
「もうここいらは安全だからな。気をつけて帰れよ」

語尾にハートマークでも付く勢いで甘く語りかける。レンズたちは被りを振るように上下に頷いて、ガサリと音を立てて消えていく。
と、その時だった。
「あぁん！」
バリィン！とお決まりの音が聞こえて、ただでさえ少ない布地が木っ端微塵に弾け飛ぶ。今回は何が吹っ飛んだかといえば、ビキニパンツと編みタイツの太腿部分だった。露わになってしまった恥部を黒のグローブの手で覆い隠して内股をキュッと閉じてペタリと座り込む。
「やだぁまたかよぉ」
同時にカメラのシャッター音とフラッシュ音がバシャバシャと激しく鳴り響く。まるで記者会見場のシャッター嵐のようだ。いや、この話はあくまでパロだがな。
「う、すみません、ぐっ・・・・・・」
悔しげに歯噛みするリツニャン。彼はいつも怒りで興奮しすぎてゴールデンフォックスの衣装まで焼いてしまうのだった。やり過ぎである。
「あんっばかぁ、これじゃみんなに見られて恥ずかしい・・・・・・ッ」
そう言いつつもはぁはぁと荒く息を吐く彼は、頬を赤らめ興奮している様子だ。見られてエキサイトするタイプだったのか書きながら知ったわ（真面目にやれ）。
無数のカメラのレンズたちに見守られながら撮影の羞恥に耐え、肌を桃色に染めていくゴールデンフォックス。その手元の恥部は硬度を増して、ぐんと立ち上がっている様子で手を離すことが出来ない。だが。
「いっそ、見せちゃおっかな・・・・・・？」
うふん、と赤らんだ顔で悩ましげに微笑み、唇に指を当て小首を傾げる。その様子に一斉にレンズたちが茂みから飛び出してくる。それらはすべてゴツい望遠レンズを装着した一眼レフカメラを構えたおびただしい数のモブオヤジの群であった。装備がすげえ。
「んふ、そんなに見たい・・・・・・？じゃあ」
ぱかり、と脚を開くゴールデンフォックス。白い内股が闇夜の街灯

の光を淡く反射し、ぼうっと浮かび上がった。そして、当てられた手をそっ、と移動させてゆく。固唾を呑む音がその空間に響いた。
おいここ空間じゃなくて外なんだが？
「ご、か、い、ちょ、う」
すると。
「公！然！猥！褻！罪！！！！！！」
まるで陰陽師が印を唱えるかの如くに声を張り上げて、一文字ずつ罪名を叫んでくる聞き覚えのある声。その低い怒鳴り声が響くや否や、カメラオヤジたちはゴキブリのようにカサカサと闇の中に消えていった。
「あ、エクボじゃん、やっほー」
「やっほー！じゃねぇわクソ野郎！逮捕すんぞコラァ！」
額に青筋を立てながら息を切らしてゼエゼエと汗だくになっているエクボは、袖口で汗を拭いながら苛立ち紛れに捲し立てる。
「また！ご丁寧な市民の皆様からなぁ！」
「うん」
「なんか半裸の変態が猫耳付けた子供たち侍らせて公道を楽しそうに走り回ってるって通報があってだな！」
「半裸の変態？そりゃとんでもねぇな」
「テメーのことだよばかやろお！」
ビッシィ！と人差し指でゴールデンフォックスを指して激しくツッコむエクボ。
「慌てて来てみりゃ異能物の代わりにテメーがいるじゃねぇかっ・・・・・・」
よよ、と泣き崩れそうになって夜空を仰ぐエクボ。
「俺様もう疲れた・・・・・・イヤ・・・・・・」
「じゃあ辞めれば？」
「お前が大人しくすりゃあいいんだっつぅの！」
「えぇー・・・・・・」
エクボの悲痛な叫びの趣旨はゴールデンフォックスには音声では届いても、その意味合いまでは届かない。理解力の相違というやつだ。
すると、エクボの元にモブニャンとリツニャンが歩み寄る。

「こんばんはエクボ」
「おう、シゲオと律か」
話にならないゴールデンフォックスとの会話に疲労感を蓄積させたエクボは、猫耳の二人にため息を吐く。
「今日はあまり師匠を怒らないでください」
「悔しいですが兄さんに賛成です」
「は？」
「お前ら・・・・・・」
地べたに座り込むゴールデンフォックスが、自分を庇う二人の様子に感動で涙をぽろりと流す。
「今日は師匠、役に立ちました」
「え」
モブニャンの言葉にゴールデンフォックスの狼狽する声が出る。構わずリツニャンが続く。
「はい、大変不本意ですが、ほんの微力ですが」
「えっ」
「剃り残したワキ毛を剃り落とすという立派な功績を残しました」
「いやそれ功績とか言えないからな？！」
エクボの悲痛な激しいツッコミが辺りに響く。
「今回の異能物がうら若き乙女の剃り残しのワキ毛を狙う姑息な奴だったので」
「いやいやいやいやおかしいだろ！だったらなんでアイツが狙われるわけ？！あいつオッサンだぞ？！」
本当に頭痛がしてきそうな勢いで眉間に皺が寄るエクボ。対するゴールデンフォックスは楽観的だ。空いた手で鼻をほじりながらのうのうと答える。
「知らねーよ。異能物に聞けよー」
「ああぁぁぁ・・・・・・」
今宵も通報を受けてエクボは真摯にやってきたのだ。なんで息を切らしてやってきたのかというと、愛用の大型バイクを車検に出しており、うっかり代車を頼むのを忘れていたため、急遽近所の交番からお巡りさん用の自転車を借りて爆速でこいで来たからだった。今回はまだ19時を少し回ったところで深夜ではないからゆっくり寝れ

そうだぞ吉岡（身体）。
頭をぶんと振り、気を取り直してエクボはゴールデンフォックスのコスチュームをしげしげと見る。
「そういやお前また衣装違うな。そんなにコスプレ好きなのかよ」
今日はまた変な格好だな、と一瞥して手錠をチャリ、とかざす。エクボは現行犯逮捕する気満々だ。
「バッカ違えよ！退治に行く時にモブニャンリツニャンが俺をメタモルフォーゼ★させてくれるんだが、そん時のアイツらの調子の良し悪しで見た目が変わっちまうんだよ」
ゴールデンフォックスはひくりと震えて顔を赤らめ手錠を見つめる。なんか激しく勘違いしているようだが。
「・・・・・・はぁ？」
頭にハテナマークをたくさん浮かべながらゲンナリした顔をして手錠を取り下げるエクボ。
「デフォルトはマジック★ボンデージなんだが、調子が良すぎても悪すぎてもダメなんだよな」
「ダメだとどうなる」
「全裸かタンキニか葉っぱ隊（前張り無し）」
「・・・・・・」
それは流石に捕まるだろうな。嗚呼。
「これ一度やるとやり直しきかねぇから、それになったら自宅待機決定な」
「役立たずな正義の味方だな」
「ていうか手錠プレイしたいんじゃないの？」
ンフ、と含み笑いをしてゴールデンフォックスが街灯にしなだれかかり、下から上へと人差し指でつつつ、となぞった。
「違えわ公然猥褻罪でゴ●ギツネ様を現行犯逮捕しようとしてんだよ！」
「だからゴン●ツネじゃねぇっての！」
ギャンギャンと喚く迷惑な全裸の成人男性28歳を前にして、今日もエクボは痛む頭を押さえて公務を遂行するのだった。
さて、今回はどんな展開があるのだろうか（もう辞めていいかな）。

「いらっしゃいませ。ようこそお越しくださいました！ご予約のお客様ですね」
明るい声、清潔な身だしなみ、屈託のない満面の営業スマイル。ビジネスマナーのお手本の塊とでも言えそうなほどの仰々しい態度で身振り手振りを交えて顧客を招き入れ、接客をする霊幻新隆。彼は異能とか相談所を営むうら若き所長である。まあアラサーだが。
予約客として対峙する相手は、妙に興奮しているモブオヤジ（40代くらい）である。この相談所はどういうわけかオッサンがよく釣れる。
「あ、あっあらたかくん！今日もか、かわいいねドゥフ」
「霊幻とお呼びください」
小首を傾げて唇に人差し指を当て、上目遣いでとろりと見つめられ、オッサン大歓喜で鼻血がブッパされる。それをするりとかわす霊幻。
「今日はいつもご依頼の呪術クラッシュでよろしいですか？」
「ハイッ！ほっ本番ありのCコースで！」
「本気のCコースです。本番はありませんよー」
いやでも、と霊幻がにこりと笑う。
「呪術クラッシュならAコースで充分ですのでそちらでお願いしますね」
「えっえっでもっ」
身を乗り出して縋り付くオッサンに、背後からひたりと手が触れる。あまりに禍々しいオーラにオッサンが恐る恐る振り返る。
「師匠に、触るな」
「っひ！」
「もぉーぶ君、めっ」
怒りでどす黒いオーラを纏わせこの世の終焉を彷彿とさせるような佇まいを見せるのは、影山茂夫だ。黒の学ランを身にまとい、髪の毛を逆立てて目を大きく見開いてオッサンをギロリと睨め付ける。
その様子に霊幻が頭をワシワシと撫でた。
「だめだぞぉ？お客様なんだからなー？ささ、ではそちらにお座り

ください」
「えっ！今日は施術台で全身ぬるぬる♡ローションプレイ★あらたかソルトスプラッシュ♡ではぁッ？！」
「あはは、またご冗談を。今日は肩を重点的に異能物を流すお手伝いですからね」
「コイツコロス」
「もぶくぅん？」
茂夫の明らかな殺意にチビりそうになっているオッサンを前にして、霊幻は手際よく肩揉みを施していく。この相談所はほんとにこういう顧客が多い。
茂夫が激しく（そりゃもう殺す勢いで）睨みを効かせる中施術が終了し、オッサンは名残惜しそうに霊幻を見つめて手を握ろうとする。が、茂夫の監視が止まらない為、悔しそうに汗をかいて震える手で茂夫に料金を支払い、足早に出ていく。なんどもチラリチラリと霊幻を振り返りながら。
「あらたかくん！お、お見送りを」
「早く出てけ穢らわしい」
「ヒィイ！」
茂夫のとどめのデスボイス（本気）に縮み上がったオッサンは、バターン！とドアを勢いよく開閉して消えた。
「あー今日もよく働いた！」
無事に接客が終了して気を抜く霊幻。桃色のネクタイを緩めてうーんと伸びをするその様子は、ジャケットから覗く細い腰を際立たせる。こんなものオッサン達が放っておかないというやつだ、って認識で合ってますかね？（聞くな）

霊幻がこの「異能とか相談所」を営むには理由がある。
彼は異能物の声を聞くことができる除霊屋なのだが、彼の実家である霊幻家は代々続く由緒正しき祓魔師の家系だ。霊幻には歳上の姉がおり、本来は女系後継で祓魔師を継ぐのも姉なのだが、祓魔師として代々伝わる装束がマジカル★ボンデージ（通常運転）、しかも何かあればラッキースケベ頻発のため、死んでも着るのは嫌だと後継を嫌がって嫁に出てしまい、仕方なく弟の新隆がその役割を継ぐ

ことになったのだった。姉は先祖から代々引き継がれた強大な力を持ったまま嫁ぎ、初夜と共に力を失った。現在は力の「ち」の字ほどのちっぽけな能力すら持たず、「声」しか聞こえない新隆が当主を名乗り、モブニャンリツニャンの助けを得て夜を駆け抜けているのである。
モブニャンリツニャン。かわいいだろ。ンッゲフンゲフ。彼ら二人は代々霊幻家に仕える魔族の子孫だ。
モブニャンは霊幻の言葉に巧みに脳を浮かされ惚れ込んでおり、リツニャンは大事な兄をたぶらかす霊幻に嫌悪感を持ちつつ、霊幻を好きな気持ちを隠せずに毎度痛い目を見ていた（ダメじゃん）。
ここまで読んでてお分かりと思うが、処女性を大事にする能力だ。はたしてこの法則が霊幻に通じるのか？男のケツ処女でも適用されるのか？モブオヤジとしては気になるところだろう。霊幻の処女を狙うモブオヤジは後を経たない。そしてゴールデンフォックスを題材にする二次創作界隈では、腐女子の皆様により吉岡兼エクボとのイチャラブでとっくに非処女になった霊幻がものすごい情報量を伴って超光速で光回線よりも早く飛び交うのだった。またオタク特有の早口になってしまった。すまない。

さて、と霊幻が肩を回しながら椅子に座って、意識を集中して異能物の声を聞く。集中するのと同時に全身に淡い金の光を纏い、頭にひょこりと狐の耳、尻にふっさりとした尻尾が生える。その耳がぴくりぴくりと音を拾うために微細に動く。
流石というべきか、やはりそこは調味市である。早速降って湧いたように微かにおどろおどろしい声が脳に響いてきたのをキャッチして、狐耳がぴんと立った。
なにやらモゴモゴ言っているのが聞こえるが、やたらと。
（シリ・・・・・・モモ、ジリ・・・・・・）
とうわ言のように繰り返しているのが聞こえてくる。
「なんだこいつ、やたらとケツが好きみたいだな」
発現している方角と地理をある程度特定して、集中モードをオフにする。生えていた耳と尻尾はふわりと消えて、霊幻がほ、とため息をつく。

「師匠、今日の異能物はなんですかね」
「母親に夕飯メニュー聞くみたいに言うなよ。正直わからん」
ギッ、と椅子を軋ませて身体を預ける霊幻。
「まあ今夜も退治になるな。モブニャンいけるか」
「はい、僕はいつでも師匠のお側に」
「リツニャンは？」
「生徒会でメイドコスプレコンテストやるから居残りだそうです」
「何やってんだ生徒会」
この世の苦渋を全て飲み下したような顔をするメイド服のリツニャンの顔が目に浮かぶ。大変に可愛らしい。
「・・・・・・見に行くか」
「師匠は確実に黒焦げ以上になって抹消されます」
「えっ俺消されちゃうの？！」
リツニャンの予想以上のツンぶりに霊幻は少し興奮して息を荒げてしまったのだった。

19時を回った頃である。
生徒会により激しく精神を消耗したリツニャンは今回の討伐には参加せず自宅療養となる。今回は相談所から現場へ直行することにしたので、霊幻はいそいそとドアの鍵を閉め、ブラインドを下ろして閉じた。そして、おもむろにジャケットを脱ぎ、ネクタイに手をかけ、しゅるりと解く。
「なぁモブニャン、変身する時全裸じゃないとダメ？」
「ダメです」
有無を言わさず、食い気味に即答するモブニャン。
「もしそのスーツのまま変身したら、マジカル★ボンデージの主成分がスーツになるので、破けた後に変身が解けた時、スーツがビリビリになります」
「デスヨネー」
チベットスナギツネのような虚無顔になってモブニャンを見つめる。実はスーツを一度ダメにしており、経験済みなのだ。だが敢えてそれを聞くというのは、変身というリリカルな演出なのにアナロ

グに脱衣しなければならないところにある。しかもその脱衣中、モブニャンリツニャンはガン見して鼻血を出しているのだ。そのうち出血多量で死ぬかもしれない。
スーツも下着も靴下さえも全て取り払った裸体を某名画ビーナス像のようなポージングであらわして、濃いすね毛のふくらはぎをモゾモゾと寄せて霊幻の霊幻をぎゅうと隠す。
「よし、やってくれ」
霊幻の掛け声と共にモブニャンが影山茂夫の仮初の姿を解除して、猫耳と尻尾の生えた魔族の姿に戻る。そして彼が右手を挙げ、
シュッと振り下ろす。
「メタモルフォーゼ！」
どこからともなく現れる黒い幅広のリボンたちが霊幻の肢体にシュルシュルと絡みついていく。肌の上を滑りながら巻き付いてきゅう、と圧迫するので、特に霊幻の霊幻はこの感触に耐えきれずむくむくと成長してしまうのだ。
「あっああぁああんんッ！」
毎度のことながら変身時に嬌声をあげてしまう。これモブニャン、わざとではないだろうかと恨めしくも思うが聞いても毎度はぐらかされる。絶対確信犯だ。
今日の衣装はなんだろうか、と考えながら刺激に耐えていると、だんだんと装いが見えてくる。そして完全に変身が終わった時には、立派に勃起した霊幻自身で押し上げられる下半身の装束。みっともなさすぎる。
下半身を両手で押さえて膝を擦り合わせながら確認するその衣装は。
「・・・・・何これ」
幸い全裸でもタンキニでも葉っぱ隊（前張りなし）でもなかったが、それは一見なんのコスプレなのかわからなかった。顔には少しきつめに見える形のメガネ、胸元が大きく開かれた白いブラウスを肘までまくり、下半身は黒のタイトスカートが骨盤の丸さを強調するようにピッタリと装着されている。通常のものより短い丈から覗くスラリとした脚には薄手の黒ストッキングと黒革のヒール。下肢は見る角度によっては黒地の中にうっすら白い肌が透けている。

「え、マジで何これ」
「今日は成功しましたね！女教師ですね！！」
これでは霊幻姉も後継から逃げ出すはずである。モブニャンリツニャンをはじめとする魔族は基本的に人間界のAVを参考にして装束提供を行なっているのだった。彼らの情操教育は一体どうなっているんだろう。昨晩のバニーコスプレといい、彼がこういった衣装を身につけて飛び回るのはこういった事情からだった。
だが霊幻は心優しい。力を使って与えてもらった装束に決して文句は言わず、いつの頃からか楽しむようになっていた。おかげで調味の兄どころか調味のセックスシンボル、はたまたインターネットセックスシンボルとして世界に広まりを見せるのであった。果たして良いことなのかよくわからん。
「とっても素敵です師匠！さあ行きましょう！」
鼻息荒く意気込むモブニャンに、霊幻がおずおずと待ったをかける。勃起がおさまらず、霊幻の霊幻がスカートを押し上げて、とてもじゃないが逮捕される勢いだった。

霊幻もといゴールデンフォックスとモブニャンが現場に駆けつけるために、不思議な力で空を自在に駆ける。
日が落ちた夜の空が調味市の繁華街のネオンを反射して、街ゆく市民からはパンツも含めて丸見えであった。そしてテンション高めに「わーははは！」とやけに響く高笑いを放ちながら飛んでいく。なんだこれ。猫のトイレハイかよ。
「あっ！あいつらまた！！」
それを調査の帰りに目ざとく見つけてしまうエクボ。一緒にいた後輩が望遠鏡でそれを見て興奮している。
「なあ、あれ逮捕されねぇの？」
エクボがゲンナリして後輩に問う。彼は望遠鏡から顔を離して真面目に答えた。
「ハッ。味玉県警察本部長殿から直々に、あれは良いとのことです！」
「えぇ・・・・・・」

ゴールデンフォックス一行の移動を皮切りに、一斉にカメラを構えたモブオヤジたちが街中を走り、地響きと地鳴りがする。この街には変態しかいないのだろうか。
早く公然猥褻罪でも強制猥褻罪でもいいからとっ捕まえて自分の仕事を減らして欲しいと切に願っていた吉岡と悪霊の願いは、無惨にも打ち砕かれたのだった。

「・・・・・・何これ」
そして、本日二度目の何これである。こっちが聞きたい。
現場に到着した彼らが見たものは、ただの大きな白い壁だった。それが脈絡もなく、いきなり児童公園の真ん中にどんと発現し、暴れるでもなくしん、と静かに立ち尽くしている。
触ってみれば普通に硬く、異能物だからといって生物らしさとも言える肉っぽさなどが見えるわけではない。そして、不自然に空いている穴。覗き込めば異空間に繋がっているのかと顔を突っ込んでみても、そういった様子もない。不動の壁はその場に、ただ立っているだけだ。
「何これ」
「僕にもわからないです」
モブニャンも困ったように返事をする。そりゃそうだ。
「なんで穴だけ空いてんだ？」
「僕にもわからないです」
「だよなー」
ゴールデンフォックスは相談所でやった時のように、また集中して声を聞く。再度狐耳と尻尾が生えて、女教師コスプレの衣装と相まってますます意味不明な格好になっていくが気にしない。
（シリ、シリ！モモ！シリ！）
相変わらず尻しか言わない変態な壁であることは明らかだ。だが。
（アナ！ハイル！アナ！アナ！）
壁の声は興奮みを帯びて、叫ぶようにゴールデンフォックスへと語りかけてくる。
「はぁ？穴？」

確かに穴は空いているが、ここに入れということかと察して、よっこいせと手を掛ける。そして頭をくぐらせて、肩を通し、ウエストまで潜り切った。その時だった。
「ッ？！」
潜った穴が急に縮まり、がしとウエスト周りを固定して、抜けなくなってしまったのだった。前後に動いてもびくともせず、ゴールデンフォックスは焦って冷や汗をダラダラと流す。
「えっ！俺そんなに太った？！」
いや、元々ハマるのが初めての穴なのに体格の変化などわかるわけないだろ。
「師匠！」
「抜けねぇぇ！溶かせモブ！」
モブニャンがゴールデンフォックスのハマった壁に何度も力を込めた拳を撃ち込んでいくが、びくともしない。それほどまでにこの壁は頑強だった。そしてこの特徴を慌てふためきながらも考えて、
はっと思いつく。
「師匠、そいつの正体わかりました！」
「マジで！何これ！」
「妖怪・壁尻です！！！」
「なっ？！」
「そいつはターゲットを壁の穴に固定して、ズコバコやりまくるど変態妖怪です！！あと！」
「なんだ！」
モブニャンがスゥ、と息を吸って、あたり一帯に響き渡る声で思い切り叫ぶ。
「師匠は処女じゃなくなったらもうゴールデンフォックスとして戦えません！！」
「ぬぁにぃぃぃぃぃぃぃ！！いやそれより俺が処女って絶叫すんな！！」
いつの間にかカメラを構えたモブオヤジたちが周りに人垣を作り、即席の撮影会場が出来上がっているのを見て、ゴールデンフォックスは顔を真っ赤にしてモブニャンにツッコんだ。「処女」という単語を聞いたモブオヤジたちは湧き立ち、雄叫びをあげ互いに喜びの

ハイタッチをしているというなんとも平和的な光景が広がっている。なんつうカオスなんだ。
表には狐耳が生えてはだけた白ブラウスを着ているゴールデンフォックス、裏にはフサフサした尻尾が生えヒップラインにピッタリと貼り付くように着こなされたショート丈のタイトスカートと、そこから伸びる黒ストッキングの両下肢。タイトスカートはただでさえ丈が短いというのに、加えて尻側にスリットが深く入っている。暴れればスカートを捲らなくても履いてるパンツが丸見えだ。
ゴールデンフォックスが変な呻き声を上げながらうんうん唸って脱出を試みている間に、突然尻側の壁面がぐにゃりと歪んだ。そこから波が立つように形を変えて、生えている尻を両サイドからわっしと掴んだ。
「んひっ！」
あんなに硬かった壁面が人の手よろしく痴漢の如く尻を丁寧に揉みしだいて、ゴールデンフォックスの桃色の唇から艶を含んだ高音が響いた。同時にバシャバシャと鳴り響くシャッター音とフラッシュの嵐。
「ゴールデンフォックス！」
「ァン！なんかっ尻、揉まれて、ぇっ！ん！」
尻たぶから膝裏にかけてをつつつとなぞられてびくつき、尻肉の丸みに沿って撫で上げられて息が上がる。
「ぃやっ・・・・・・そんなに撮っちゃ、ぁっ」
妖艶に微笑んでウィンクをかましてやれば、モブオヤジたちが鼻血を吹き出して血管が切れてバタバタと倒れていく。一部生き残りもいるようだが、興奮しすぎて撮影どころではなく、股間を押さえて悶えていた。
「も、ぶにゃ、はぁ！早くたす、け、んふっ」
「わかってますよ！アンタは自分のことを守って！」
守ってと言われてもこんな状況でどうすりゃいいのか激しく問いただしたいとゴールデンフォックスは思った。そうこうしているうちに、尻と太ももを粘着質に揉みしだいていた壁面がその動きをやめ、今度はタイトスカートに触れた。そして、そのまま力任せにビリビリと破いて、剥ぎ取っていく。

「やん！ちょ、こいつ何を！」
スカートを剥ぎ取られて現れたのは、黒ストッキングを纏った腰から下である。なんとパンツを普通に履いていると思っていたが、Tバックだった。魔族のこだわりは強いらしい。いや、驚くところがそこなのであればもう書くのやめた方がいいんじゃないだろうか（溜息）。
そんな黒ストッキングも、壁面が人間の手の形状に形を器用に変えて引っ掛け、強引に引っ張る。耐久値の限界を超えたその薄布は、バツバツと小気味よい音を立てて伝線して損傷し、まろやかな乳色の双丘と腿の裏側が姿を現した。
「あぁあ！やだ、そんな破いちゃ、いやぁっ」
艶めく声を上げて脚をばたつかせるが、一向に壁の穴が緩くなる様子もなく、布をむしり取られた裸の臀部と腿が夜風に撫でられて、ぞくりと肌が泡立つ。ついに壁から生えた手が、尻の割れ目に沿って細く存在を繋ぐTバックに指をかけ、くん、と引っ張り股間から脱がそうと下にずり下ろし始めた。
「ひやあああ！だめ！脱がしちゃやだぁ！」
抵抗しているのか喜んでいるのかわからないほど、語尾にハートマークがつく勢いで甲高く甘い声をあげるゴールデンフォックス。予想通りTバックもぶちぶちと引きちぎられて、完全に裸になった白い桃尻が顕になったのだった。
思い出されるのはモブニャンの言っていた注意事項。処女性を失えば除霊屋として動けなくなる。元々役立たずなのでそれはいいとしても、モブニャンリツニャンまで手放し、魔界に帰すことになってしまう。彼らは修行の身であっても人間界を楽しんでいる。そんな二人を自分の都合で実家送りにしてしまうなど許せなかった。だが現実問題、何も抵抗の術がない。
いよいよ割開かれる尻たぶ。左右にグヌと指が食い込む勢いで掴まれて、菊門に何かヌルついたものがひたりと当てがわれた。
「だめ！やめろ！いやだあ！」
真っ青になってバタバタと暴れるが、がっちりと腰を固定され、本当に動けない。

あぁ、もう、さよなら、俺のケツ。

尻に別れを告げ、モブニャンリツニャンの鼻血を噴き出す様子を走馬灯のように思い出しながら、全てを諦めた時だった。

ガウン！

一発の銃声が轟き、眩い光が闇の中で流星のように線を描いて煌めき、ゴールデンフォックスを捕らえていた白壁をドガァンと貫いた。ヒビを入れられ、一部を大きく抉られ大穴が空いた白壁は、痛みに悶絶して耳をつんざくような悲鳴をあげる。
「ンギャアアアアア！！！！」
「っうるさぁっ！」
聞き覚えのある低いがなり声。はっとして声の方角を見ると、両頬の赤い黒スーツが愛用の拳銃を躊躇なくまっすぐに構え、狙いを定めて三白眼でギロリと睨め付けていたのだった。
「！エクボ」
「大人しくしてろ！死にたくなきゃぁな！！」
まるで悪役が人質に対して吐くような極悪なセリフを公然と吐く国家公務員。的を見据える顔にはドス黒い影が落ち、目のみがギラギラと見開かれて、まるで闇からこちらを覗く、静かに怒り狂う獣のようにさえ見えた。がちり、とエクボは激鉄を起こし、再度引き金を引いた。

ガァン！

二発目の聖光弾も壁に命中し、その威力にまた悲鳴をあげながらぼろぼろと崩れ、ゴールデンフォックスがどさりと解放される。地面に放り出された彼は丸出しの下半身をブラウスを手繰り寄せて必死

に隠す。特に前を。
「・・・もう一発、いっとくかぁ？」
ニヤリと笑みを浮かべるその顔は、市民の安全を守る人間とは言えないほどに歪み、その形相は悪魔そのものだった。まあ中身は上級悪霊だしな。
「受け取れやぁ三下ぁ！」
三発目の弾丸が撃ち放たれて、白壁の急所に見事命中したようだった。それこそまたひどい悲鳴を上げて、ぶすぶすと黒い煙をあげ、妖怪・壁尻は消えた。
「はン！雑魚臭きついぜ」
不満げに鼻を鳴らして、エクボはゴールデンフォックスのそばに歩み寄っていく。また役立たずが、と文句の一つでも言ってやりたいと歯噛みして睨みつけた。だがそこにいたのは、確かに彼だったのだが。
「っ・・・・・・え、く・・・・・・ぅっ」
生えた狐耳がしゅんと項垂れて、尻から生えたもっさりとした尻尾を腿の間で挟み込み、全身をガクガクと打ち震わせる、人間なのかよくわからない存在となっている変なコスプレの彼がいた。
「・・・・・・今日の格好のテーマはなんなんだ一体」
「もう俺にもさっぱりわからん」
「葉っぱ隊（前張り無し）じゃなくてよかったな」
「ほんとだな（棒）」
今回は珍しく、エクボがボケているようだ。調子はずれで今いちすっきりしない。だが。
「怖かったな。もう大丈夫だからな」
項垂れた大きな耳ごと、頭をわしゃわしゃと撫でる。その低くも優しく染み渡るような声音に、ゴールデンフォックスは霊幻としてエクボに接してしまい、頬を赤く染めた。どきん、と心臓が高鳴って霊幻は自分を一瞬疑った。
エクボは気づかない様子で、狐耳を撫でながら疲れたようにため息をつく。
「はぁ実家の犬みてぇ。お稲荷さん食いたくなってきたわ」
「・・・・・・俺のおいなりさん、食う？」

「遠慮しときます」
ふあ、と大きな欠伸をかまして銃をしまうエクボ。ガリガリと頭をかきながら、周りに倒れているカメラオヤジたちに声を掛けて自宅に帰るよう誘導する。その様子を見て、霊幻はまだ心臓がどきんと高鳴るのを止められず、焦っていた。もちろん顔には出さない。

なんだろう、この気持ちは。

「・・・・・・・不整脈かもしんねぇな」
「あ？お前もそろそろ歳だろうが。病院行けよ」
地獄耳で聞きつけたエクボが振り返って霊幻に言葉を投げてくる。
「なんなら救●とかいうやつ買っとけや。はぁーもう早く帰って飯食って寝よ」
「うるせぇそこまでモウロクしてねぇよ。ところでさ送りやがれください」
「バイクが車検で戻ってきてねぇから無理」
「代車」
「借りてねぇ」
絶望に打ちひしがれる霊幻。
霊幻は今日こそ自宅への帰還ルートを、頭を絞りまくって考えるのだった。

結局その夜は、疲弊したモブニャンに更に力を使わせて特殊なシールドを張り、空を飛んで帰った。
自宅に無事に到着した霊幻は、夜風に吹きっさらした霊幻の霊幻が寒さで縮こまって風邪を引きそうだったので、熱いシャワーを浴びる。
齢28。この歳にして感じる恋心にしては甘酸っぱすぎて、アラサー男性ということを忘れてはしゃぎ散らかしてしまいそうで困る。思いを巡らせるほどに血流が巡って飲んでもないのに酔いそうだ。高鳴る気持ちを胸にしまい、霊幻は宙を見つめる。
「やだ、俺、エクボのこと・・・」

胸にしまった気持ちは、しまいきれずに胸をぶち破って口から飛び出した。一人でニヤニヤと笑ったりはっとして真っ青になったりしながら、彼は風呂で百面相を繰り返していた。
最終的にのぼせて、クタクタのモブニャンに担ぎ出されたのは言うまでもない。

「ヒェックショイ！！」
中年男性らしい派手なくしゃみをして鼻水を垂らすエクボ。
今日はもうとにかく眠かった。車検に出したバイクがまだ戻ってこないため、警察署内の自転車を一時的に借りて自転車通勤、そして現場駆けつけを繰り返している上に、早朝から調味市異能物調査に駆り出されて挙句今晩のゴールデンフォックス騒ぎである。
いつものツッコミが最後のあたりで冴えなかったのは、もうそんなこともできないくらいに眠気に脳みそを支配されていたからだった。
まさか霊幻が自分のことをあれやこれやと考えて風呂でぶっ倒れて目を回しているなんて梅雨ほども知らず、彼は久しぶりにやってきた夜の安眠を心地よく迎えるのだった。

たらららたったたたたららららーん（適当音楽）
調味のセックスシンボル・ゴールデンフォックスに気持ちの変化？！
忍び寄る魔（セクハラ）の手？！エクボがついに手を出すのか？！
あっ、そこ、入っちゃダメなのぉ！！
次回！！
「セックスシンボルとひみつの秘密♡」
お楽しみに！！！！！！！

内容ぼやかしすぎて次回のネタが定まらねぇ。